文学部

文学部生の リアルな! 学生生活 Vol.36

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

FACULTY OF LETTERS

日本史で広がる過去、現在、未来へのつながりと経験

文学部人文社会学科日本史学専攻４年
山梨県立上野原高等学校出身
髙橋 智也（たかはし ともや）

一緒に活動する友人に恵まれました。後列右から二人目が筆者

はじめに

もともと日本昔話の「うしわかまる」（元服して源義経）が好きでした。そんな私が日本史学を専攻しようとしたきっかけは、中学生の家紋研究からでした。ある日、ふと「我が家の家紋って何だろう？」と興味が湧き、家紋を調べることによって自分自身が歴史にかかわっていることに気付いて感動しました。それ以来、日本史を深く勉強したいと考え現在に至ります。

大学生活を始めるにあたり、高校まで地元の学校に通っていた私は、2つの県境をまたぐ初めての電車通学が楽しみである一方、友人作りに不安を感じていました。さまざまなガイダンスを経ても一人も友人ができず、とても焦っていました。しかし、授業が始まると同じクラスの友人ができ、さらに友人の友人、さらにサークルの友人と、一気に友人の輪が広がり、学生生活も軌道に乗り始めました。日本史学を専攻している学生のほとんどは、何といっても日本史が好きです。日本史の話でご飯が何杯も食べられそうです。それぞれ好きな時代が異なるため、さまざまな意見が飛び交って話題は尽きません。

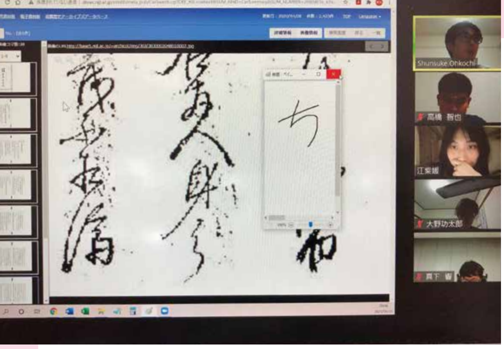
私は現在、日本近世史ゼミに所属しています。江戸時代は人々のリテラシーが向上したことにより、数々の古文書が今に残されています。そのため、戦国時代以前に比べてはるかに史料の数が多く、明治以降に比べて「これぞ日本史学」と思えるようなザ・古文書に出会いやすいです。しかし、史料が残っているからといって、すぐにそれを読めるわけではありません。中には保存状態が悪い史料も多く存在します。このような史料を取り扱う知識がないと、史料が破損したり、最悪の場合は跡形もなく消滅したりすることもあります。史料を後代に伝えること、これは至上命題です。

博物館で展示させてもらった一部です

博物館学芸員課程、史料扱いを学ぶために

「文でも資格」。文学部と聞くと教員免許以外の資格には縁遠いと思われがちです。しかし、我が文学部には専門職資格課程が開講されており、学芸員課程も含まれます。学芸員は博物館の業務を司るれっきとした研究職であり、史料の扱いに精通するスキルが求められます。私は「学芸員課程に進めば、史料の扱いが学べる」と考え、履修を決めました。カリキュラムには、私の目的であった史料の取り扱いはもちろん、「いかに来館者に対して興味を持ってもらえるように史料を置くか」「史料の概要を掴んでもらうために、説明文をいかに簡略にするか」といった史料の価値を伝える展示の手法についても学びました。3年次には、実際に博物館に赴いて業務を体験する博物館実習を行いました。実習では古文書や刀の取り扱いのほか、展示入れ替えの時期に重なったおかげで史料展示も体験できました（しばらくの間、博物館で正規の展示として扱っていただくことができました）。単純に史料の扱いが学びたいからと飛び込んだ学芸員

筆者です、いつ撮られたのでしょうか



くずし字教室の様子、オンラインを活用

あくまで「学術」サークルです

課程でしたが、古文書だけでなくさまざまな史料を取り扱うことができ、博物館がいかに工夫して我々に歴史的価値に触れる場を提供しようとしているのかを学ぶ機会にもなり、大変貴重な体験となりました。

古文書の壁、くずし字

史料の扱い方もある程度学び、「さあ史料と対面せん」と意気込んでいた私。しかし、またしても壁にぶち当たります。それがくずし字。明治以降の史料は比較的現代に近い文字で、漢文の心得があれば読むのに困ることはない（近代研究家の方々、浅はかな推測で申し訳ないです）と思います。しかし近世江戸時代の文字はミミズが這ったような文字で、何が書いてあるのか分かりません。私たちは外国語を学びますが、このくずし字に対面すると「あれ、日本語なのにワカラナイ」とまるで新たな外国語を学修しているかのような感覚に陥ります。このままでは過去の人々が残した記憶に迫ることができません。

私は現状を打破するために、学部生でも大学院の授業が受講できる制度を利用し、より日本史学を深く学べる大学院の授業を受けることにしました。大学院の授業は真の研究なので、知識を摂取する学部の授業とは訳が違います。専門用語のオンパレードで何が何だか分かりません。しかし、真の研究をこの目で見ることができたこと、これは貴重な経験でした。そして、問題はくずし字。困っている学部生の私を見るに見かねて、院生の方がくずし字を学ぶ自主ゼミを開いてくれました。それでも最初はさっぱり理解できませんでしたが、読解を重ねるうちに「候」や「御」などといった頻繁に使われる字の判別ができるようになり、少しずつ読めるようになってきました。とはいえ、まだまだくずし字に対しては不安が残る部分が多く、鍛錬が必要だと感じています。

おわりに

ここまで、日本史学専攻における私の取り組みを紹介しました。日本史という一つの学問を通して得られた多くの人々との関係、経験は、文学部に在籍していたからこそのものだと断言できます。日本史を学び過去と対話することで、現代の生活の中で人々との横のつながりを得て、さらには未来に対する目標を持つことができました。このことは、私のかけがえのない財産です。家紋など身近なもので構いません。皆さんも小さな歴史に触れることで、大きな経験を手にしてください。

文学部だより

事務室の取り組み—コロナ禍での情報発信

文学部事務室　井澤（いざわ） 菜々子（ななこ）

コロナ禍において、文学部事務室でも変化が求められる場面が多々ありました。その一つが情報発信です。以前はC plusの「お知らせ」に情報を掲載しつつ、重要事項は対面形式でも周知していました。しかし、コロナ禍においては対面で補完していた情報もオンライン上で完結させる必要が生じ、結果としてC plusに情報があふれる事態になりました。その上、増えたお知らせのほとんどは新型コロナウイルス関連で緊急度も高かったため、その他のお知らせが見つかりづらい状況となりました。

ただ、大学から発信する情報はその緊急度に差があったとしてもどれも重要であり、必要とする人にきちんと届けなくてはならないものなので、あらためて情報発信の方法を文学部事務室内で見直しました。

まずは発信側として「お知らせ」への掲載ルールを再整備し、学生側が必要な情報を探しやすくなるよう心掛けました。ただ「お知らせ」は時系列順に表示されるので、どうしても古い情報は埋もれてしまいます。そこで、掲載から時間が経った情報も簡単に探せるようC plus内に「文学部生向けお役立ち情報」というフォルダを新設し、情報を蓄積していく運用にしました。時間割や文学部独自奨学金の情報をはじめ、休学届など各種届出様式を掲載しています。まだ導入して日が浅いのですが、運用しながら日々改良していく予定です。そして、最終的には「困ったときにまずC plusを見に行く」「C plusを見れば何とかなる」そんな場所としてご子女の皆さまに浸透させていきたいと考えております。

特に学期初めは多くの大切な情報を発信しています。是非この機会にご子女の皆さまにもC plusをのぞいてみるようお伝えください。

C plus画面イメージ